

仮設住宅でも必要とされる医療・生活支援

移動なんでも相談会
宮城・東松島市

7月16日、“移動なんでも相談会”が東松島市大塩字緑が丘の東松島市グリーンタウンやもとの仮設住宅で開催されました。宮城民医連からは、医師1人、歯科医師1人、看護師5人、技術部門9人、事務7人の合計23人がボランティア参加しました。

仮設住宅には現在300世帯が入居していますが、集会所で医師・歯科医師による健康相談、血圧計を持参して仮設住宅の訪問、物資配布などの活動をしました。また、具合が悪く歩けない患者さんのお宅へ医師が駆けつける場面もありました。

この日は気温31度という暑さでしたが、訪問した11世帯でクーラーをつけているお宅は1軒もなく、窓を開け、扇風機を回しているお宅が数軒だけでした。持参した室温計を配布しながら「熱中症にならないように水分などこまめに摂って下さい」と話をしましたが、「クーラーをつけるとどれ位電気代がかかるか心配なのでつけていない」と話してくれました。

会場では他団体による炊き出しや支援物資の配布も行われました。これまで避難所で、食事などが提供されていましたが、仮設住宅に移ると、電気・ガス・水道代は自己負担になってしまいます。収入がない人にとって、野菜などの食料品、石鹸などの生活必需品は大変喜ばれていました。

体調の悪い時はすぐに受診を



相談にのる齊藤看護師（左）と阿南医師

集会所での健康相談と仮設住宅を回った阿南陽二医師（坂総合病院）は、血圧の高い人が何人かいた。（仮設住宅では）、この暑さで介護を受ける人、介護する人が体調をくずさなければいいのですが、と話していました。便通が悪いと訴えのあったお宅では、丁寧に診察しながら、調子が悪い時は遠慮せずすぐに病院を受診するようにアドバイスをしていました。

看護師の齊藤弘子さんは、「仮設住宅でも介護ベットを入れると随分と介護しやすくなるのですが」と話していました。

笑顔で被災者の支援



松島医療生活協同組合の大崎悦子さん(写真右から2人目)は、津波で自宅が流され土台しか残らなかったといいます。ご主人や子どもさんは津波からかろうじて逃れる事ができましたが、近くに住む義理の父母が亡くなりました。ご遺体が1ヶ月以上見つからず、遺体安置所を探し回る辛い毎日だったと話してくれました。

6月1日からグリーンタウンやもとの仮設住宅に入居していますが、この日の健康相談会に参加してくれました。支援物資の配給をしている大崎さんに、何人もの方が声をかけていました。ご自身が被災されているにもかかわらず明るい笑顔で応えていた大崎さんの姿がとても印象的でした。

仮設住宅で必要とされる交流

鳴瀬町浜市地区で津波に遭い自宅が流され、仮設住宅に1人で生活している男性の住まいを拝見させて頂きました。1D(6畳)Kでクーラーは設置済み、大型テレビ、冷蔵庫、洗濯機、電子レンジ、炊飯器、電気ポットは支給されていました。

行政の方針が決まっていないために自宅跡地はそのまま、どうすることもできない。お金がないので外出もままならない。隣の家から音は聞こえてくるが気にしない様になっている。仮設住宅に、地域(浜市)の知り合いは住んでいない。仮設住宅の住民が集まって交流することもなく、夜、防犯のため消防署員が巡回にくる程度だといいます。

塩釜で、仮設住宅での孤独死が報道されていましたが、仮設住宅での様々な支援はこれからも必要とされています。

